

学生のドイツ語理解における問題点

恒川, 元行
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5368>

出版情報：言語文化論究. 6, pp.21-29, 1995-03-10. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

学生のドイツ語理解における問題点

恒川元行

1. 本稿の目的

1994年度前期に、文系(25名)および理系(70名)の2年生に対し、前年と同じ「ドイツの再統一とその後」というテーマで、「読み」の授業を行なった。この授業の第1の目的は、補助を数多く付けたテキストを使用することで、力がまだ十分でない学生にもドイツ語の「多読」を可能にし、そのことによってドイツ語の力、語感を養わせること、また第2の目的は、多読の過程でドイツに関する知識を数多く吸収させることであった。¹⁾

取り上げたテキスト²⁾はほぼ同じであるが、前年度の経験と考察に基づいて、関連情報(ビデオ、日本の新聞記事など)の与え方、作業の仕方、レポート(和訳)の提出と添削などについては、さまざまな変更を加えた上で授業を進めた。³⁾

ところで、この多読は、具体的にはドイツ語のテキストを和訳する形式で行なった。なぜなら、多読といえども、不正確な読みではドイツ語の力を養うことができず、正確な情報も得ることができないと考えたからである。この場合、基本的に、こなれた日本語よりも、むしろ逐語訳を通して、生のドイツ語と格闘することを主眼とした。

本稿の目的は、このような2年間の「読み」の授業の中で認められた、学生のドイツ語理解に関わるさまざまな問題点のうち、おもなものを整理し、まとめて提示することである。⁴⁾ これらの問題は、授業の現場では日常的問題として、ある意味では周知ではあって

も、このような形で意識化されたことは、これまであまりなかったのではないかと思われる。今後、「読み」のような初級後期から中級にかけての授業機会が減り、初級だけでドイツ語学習を終える学生が増えると予想されているが、そのような場合でも、学生にとっての潜在的問題点を十分に把握しておくことは、初級授業を再構成し、それ単独でも意味あるものとして成立させるために、重要であると考えている。

2. 比較的単純な問題

2.1 形の類似

このレベルでの学生のドイツ語理解には、Angst(不安) / August(8月)、Geschichte(歴史・物語) / Geschick(器用・熟練)、waren(seinの過去形) / Waren(品物)、eigen(自分自身の) / einige(若干の)など、語形の類似に由来する、単純な取り違えが多い。以下の例(7-4)でも、sie(先行文のdie Mauerを受ける)を複数に理解した者の割合が比較的高い(12.5%)のは、この主語代名詞の語形が、単複同形であることに起因しているものと思われる(他に、ihr / Ihrの混同など)。

(7-4) Jetzt wurde sie geöffnet, um die Massenflucht zu verhindern.⁵⁾

「それは」	45名 (51.1%, 88名中)
「壁は」	32名 (36.4%)
「それらは」	11名 (12.5%)

2. 2 記号

多読の目的の1つがドイツ情報の吸収であったため、学生には、和訳をテキスト内容の、日本語への大まかな「移し替え」と理解し、細部を蔑ろにする傾向が見られた。たとえば接続詞 denn の場合、(4-6)のように、結びを「～だ」のみとして構わない者が、比較的多い。

(4-6) Viele dieser Stoffe wurden verfilmt, denn viele Menschen teilen sein Schicksal.

「(というのは)～だからだ」

85名 (90.4%, 94名中)

「(というのは)～だ」

7名 (7.4%)

また、下例(1-2)では特に目立つ(65.9%)が、引用符の無視(和訳で「」を用いない)という傾向も、一般的に顕著である。⁹⁾

(1-2) "Glasnost" in Moskau: Was erwarten die Russen von diesem Treffen?

引用符を使用 26名 (30.6%, 85名中)

引用符の無視 56名 (65.9%)

2. 3 動詞、名詞など

動詞に関して最も基本的であるのは、使われている動詞が何かわからない、という問題である。たとえば、erschossen ((7-12)) のような、非分離前綴を持つ不規則動詞の過去分詞の例では、そもそも不定形にたどり着けない例の割合が比較的高い(28.4%)。しかし、一般に再帰動詞の理解の方がさらに悪く、sich bewegen ((2-9)) の例では36.5%が「動く」以外の理解を示している。また、下例(6-7) zurückschicken のような、独立性の強い前綴を持つ分離動詞の場合にも、一動詞としての理解は悪い。

(6-7) Die ungarische Regierung schickte die Flüchtlinge nicht zurück, wie es die DDR verlangt hatte.

「送り返す/送還する」

48名 (55.1%, 87名中)

「元の場所へ行かせる」など

37名 (42.5%)

名詞に関しては、規定・被規定の関係が、逆も十分にあり得るような合成語の場合に、たとえば Reisefreiheit ((7-1)) には「自由な旅行」(9.1%)、また Industrieroboter ((5-6)) には「ロボット産業」(2.3%) のような理解の例が見られる。また、わずかではあるが、「工業人夫」のような、いわゆる「訳しすぎ」の例も見られる(1.1%)。

学生にとってより難しいのは、動詞派生名詞が「動作」そのものを表示しているのか、それに関わる「具体物」を表わしているのかの判断である。次の(6-6)では、抽象的動作「開くこと」を具体物「開けた場所/開口部/穴」と理解した例が、比較的多い(20.7%; (7-14)でも、14.8%)。逆に、(6-14)では、具体的な「国境通過地点」が、動作「往来/横断/通過/移行」と理解されている。

(6-6) Andere waren spontan nach Budapest gereist, als sie von der Öffnung der ungarischen Grenzen hörten.

「開いたこと/開放」など

68名 (78.2%, 87名中)

「開いた場所/すきま/開口部」

18名 (20.7%)

(6-14) Nach mehr als 37 Jahren wurden die alten Übergänge jetzt geöffnet.

「国境通過地点」 57名 (65.5%, 87名中)

「国境/通路/踏切り」など

17名 (19.5%)

「往来／横断／通過／移行」など
21名 (13.8%)

この他、次例(5-15)は、特に何の問題もないように思われる接続詞 als も、学生には必ずしも明快な要素ではないことを示している。

(5-15) Darunter leiden die Deutschen als geteilte Nation besonders.

- 「(分断された国民) として」
63名 (71.6%, 88名中)
- 「(国民が分けられた) 時」
12名 (13.6%)
- 「(別れた国民) のために」
10名 (11.4%)
- 「(分割された国家のこと) よりも」
1名 (1.1%)

3. 英語の干渉

次例(2-3)では、助動詞 will の意志「つもりである」と、未来「だろう」という理解が、ほぼ同数である。これは、語形が同じであることから生じた、英語未来形の干渉と考えられる。

(2-3) Bei Umweltschutz, Kernenergie und Weltraumforschung will man künftig enger zusammenarbeiten.

- 「(共同作業を) するつもりである」
28名 (37.8%, 74名中)
- 「(共同作業を) するだろう」
29名 (39.2%)

干渉の例は、前置詞 bei にも見られる。(7-12) で、原因表示としての理解「試みによって／企てたことで」が高い比率 (43.2%) で生じているのは、英語の by の干渉によるものと考えられる。

(7-12) Ein Gedenkstein erinnert an die vielen Menschen, die bei Fluchtversuchen erschossen wurden.

- 「(逃亡の試み) の時／際に」
24名 (27.3%, 88名中)
- 「(逃亡の企て) で／(試み) のもとで」
9名 (10.2%)
- 「(逃亡の試み) によって／(企てた) ことで」など
38名 (43.2%)

さらに、(4-1) Hier hat Kempowski seine bekanntesten Romane verfaßt. の現在完了形が、わずかではあるが「書き終えた／書いたところだ」(2.1%) と理解されているのも、英語の干渉によるものと考えられる。

4. 前置詞 bei

bei のような多義的な前置詞の場合、初学者のための学習辞典でも、記述はかなり複雑である。そのため、学生には、用例を参照して意味を確認することが難しく、中途半端な理解のまま、先に進むとする傾向が見られる。たとえば、(2-1) の bei は比較的典型的な時間的用法の一例と考えられるが、場所的な「会談で／において／のもとで」の意味で理解されている割合が高い (52.7%)。

(2-1) Auch bei der Begegnung zwischen Kohl und Gorbatschow wurde über Wirtschaftsprobleme gesprochen.

- 「(会談) の時に」28名 (37.8%, 74名中)
- 「(会談) で／において／のもとで」
39名 (52.7%)
- 「会談によって」3名 (4.1%)

より抽象性の高い(2-3)、(2-4)の bei では、学習辞典の記述に、この場合に妥当と思われる「～について／関して(は)」のような訳語、および参考になるような類似の用例

を見出すことは、非常に難しい。ここでも、苦し紛れと思われる、場所的な「環境保護…に／において／のもとで」という理解が多い(52.7%, 47.3%)が、学生だけの責任とは言えないだろう。

(2-3) Bei Umweltschutz, Kernenergie und Weltraumforschung will man künftig enger zusammenarbeiten.

- 「(環境保護…)の時／際に」
6名(8.1%, 74名中)
「(環境保護…)において／のもとで」など
39名(52.7%)
「(環境保護…)について／関して」
10名(13.5%)
「(環境保護…)によって」
4名(5.4%)

(2-4) Unterschiedliche Auffassungen gibt es nach wie vor bei der deutschen Wiedervereinigung und der Situation Berlins, den politischen Grundfragen.

- 「(再統一…)の時」
3名(4.1%, 74名中)
「(再統一…)に／において／のもとで」
35名(47.3%)
「(再統一…)について／関して」
23名(31.1%)
「(再統一…)により」
3名(4.1%)

5. 付加語的な zu 不定詞句, daß 文

以下の(7-8)では、同格節「自由に生きるという(意志)」があるべきところに、関係節「自由に生きる(意志)」が、ほぼ同数用いられている。後者は、「意志」それ自体の説明(「意志が自由に生きる」)であり、「意志」の内容を表わす zu 不定詞句の働きを正しく反映したものではない。(2-9)でも、同格節

としての daß 文が、「希望」にかかる関係節(「希望が動きを見せている」)として理解されている例が多い(32.4%)。

(7-8) Der Wille, in Freiheit zu leben, war oft stärker als die Angst.

- 「自由に生きようという(意志)」
45名(51.1%, 88名中)
「自由に生きる(意志)」など
43名(48.9%)

(2-9) Es besteht die Hoffnung, daß sich in der Sowjetunion etwas bewegt.

- 「何かが動いているという(希望)」
46名(62.2%, 74名中)
「少し動きを見せている(希望)」など
24名(32.4%)

6. 受動文

6.1 受動の理解

取り上げたテキストは、いずれも受動文の割合が比較的高い。⁷⁾ 一般に、受動は学生にとって難しく、(5-4)では、能動表現「強化する」、自動詞表現「強くなる」、また動名詞「強化」という理解が、25%に上っている。⁸⁾

(5-4) Die Bundesrepublik hofft auf den Reformprozeß in Osteuropa und darauf, daß der Dialog und die Zusammenarbeit mit dem Osten verstärkt werden.

- 「(対話と協力が)強化される」
61名(69.3%, 88名中)
「(対話と協力が)強くなる」
10名(11.4%)
「(対話と協力を)強化する」
6名(6.8%)
「(対話と協力の)強化」
6名(6.8%)

日本語では一般に、3項動詞、つまり下例(5-5)の「紹介する」、(2-2)の「提供する」などの場合、「Xが、Yに、Zを紹介／提供する」に対応する受動文として、以下のように、対格成分を主語に取り立てた(a)「Xによって、Yに、Zが紹介／提供される」と、与格成分を主語に取り立てた(b)「Xによって、Yは、Zを紹介／提供される」の両方が可能である。

(5-5) Der sowjetischen Delegation wurden wissenschaftliche Projekte und Hochtechnologie vorgestellt. (X=ソ連の派遣団；Y=科学プロジェクトとハイテク)

- 「Xに、Yが(紹介された)」
29名 (33.0%, 88名中)
- 「Xは、Yを(紹介された)」
53名 (60.2%)

(2-2) Von deutschen Banken wird den Russen ein 3-Milliarden-Mark-Kredit zur Verfügung gestellt. (X=ドイツの銀行；Y=ロシア人)

- 「Xによって、Yに、借款が(提供される)」
41名 (55.4%, 74名中)
- 「Xによって、Yは、借款を(提供される)」
13名 (17.6%)
- 「Xによって、Yに、借款を(提供された)」
15名 (20.3%)

(5-5)では、受動文(a)に対し、(b)が約倍と多い(60.2%)。ここで、問題と考えられる点は、後者が、ドイツ語の文成分の格関係に無自覚まま、日本語の「感覚」で書かれた可能性があることである。上記のような受動構造の理解の弱さは、主語(および他の文成分)の意識の不十分さと関連していると思われるが、これはドイツ語構造の十分な理解の前に、日本語の干渉によって、(b)タイプの受動文が、無自覚に構成されることによって助長され

ているのではないかと思われる。また、(b)には「Xに、Yは、足を踏まれた」のようないわゆる「被害・迷惑の受身」の読みが伴うことも、意識しておくべきだろう。(2-2)には、(a)、(b)の他に、明示的な主語のない受動文「Xによって、Yに、Zを提供された」が20.3%に上っているが、この場合、「被害・迷惑」の読みはさらに明確である。¹⁰⁾

結局、日本語の受動文に2つの可能性があることを学生に自覚させ、そのうちの(a)タイプを意識的に選ばせるように指導することが、必要であると思われる。

6.2 動作主

また、動作主が、ドイツ語の受動文では von によってマークされているということも、十分には理解されていない。von 句は、動作主表示か、場所的な「起点」表示かの判断が、(2-2)のように文脈に依存している場合もあり、この意味で学生にとって難しい成分であるのは確かであろう。しかし、典型的な動作主表示の例である(2-5)でも、「起点」としての理解「コールから」が最も多い(41.9%)ことは、理解の不十分さを物語っているものと思われる。

(2-2) Von deutschen Banken wird den Russen ein 3-Milliarden-Mark-Kredit zur Verfügung gestellt.

- 「ドイツの銀行によって」
11名 (14.9%, 74名中)
- 「ドイツの銀行から／より」
58名 (78.4%)

(2-5) Sie wurden von Kohl in Moskau offen angesprochen.

- 「コールによって(言及された)」
24名 (32.4%, 74名中)
- 「コールから」
31名 (41.9%)
- 「コールに」
9名 (12.2%)

7. 語 順

7. 1 一般的な傾向

語順に関してまず気付くことは、主文に後続する副文, zu 不定詞句などを、「出てくる順に」和訳しようとする傾向である。(5-14)では「ドイツ人は望んでいる, ~を」が22.7%, (7-3)では「壁は建てられた, ~のために」が12.5%見られる。ドイツ語の語順に忠実であることは、確かに、一面では逐語訳の趣旨に合致しているが、それによって和訳があまりにも不自然になるこのような場合には、日本語の自然な語順を優先すべきであると考える。

(5-14) Die Deutschen hoffen, daß die Konfrontation der Blöcke überwunden wird.

- 「ドイツ人は, ~を望んでいる」
68名 (77.3%, 88名中)
「ドイツ人は望んでいる, ~を」
20名 (22.7%)

(7-3) Die Mauer wurde gebaut, um die Menschen an der Flucht zu verhindern.

- 「壁は, 逃亡を妨げるために, 建てられた」
69名 (78.4%, 88名中)
「壁は建てられた, 逃亡を妨げるために」
11名 (12.5%)
「壁は建てられた。それは, 逃亡を妨げるためだった」
5名 (5.7%)
「壁が建てられたのは, 逃亡を妨げるためだった」
2名 (2.3%)

7. 2 前域成分による相違

主文と副文, zu 不定詞句などの順では、上述のようにドイツ語に従うという傾向が見られる。これに対し、個々の文成分の語順に関しては、ドイツ語の語順を「無視」する傾向が認められる。つまり、(1-10)では、前置

詞句「パイプラインを通して」が前域(文頭)を占めているが、これを和訳の文頭に置き、ドイツ語の語順を和訳に逐語的に反映させている例は、16.5%ときわめて少ない。残りの大部分(77.6%)は、原文では中域にある時間表現「それ以来」を文頭に置いている。また(2-4)でも、語順を和訳に反映させているのは25.7%と最も少ないのに対し、時間表現「相変わらず」を文頭に置いている例は、40.5%に上っている。¹¹⁾

(1-10) Über eine eigene Pipeline wird seitdem sowjetisches Erdgas in die Bundesrepublik geliefert.

- 「パイプラインを通して, それ以来, 天然ガスが」
14名 (16.5%, 85名中)
「それ以来, パイプラインを通して, 天然ガスが」
38名 (44.7%)
「それ以来, 天然ガスが, パイプラインを通して」
28名 (32.9%)

(2-4) Unterschiedliche Auffassungen gibt es nach wie vor bei der deutschen Wiedervereinigung und der Situation Berlins, den politischen Grundfragen.

- 「異なった見解が, 相変わらず, ~に関して」
19名 (25.7%, 74名中)
「相変わらず, ~に関して, 異なった見解が」
30名 (40.5%)
「~に関して, 相変わらず, 異なった見解が」
23名 (31.1%)

さらに、主語が前域に置かれている(1-4), (1-6)の場合、逐語的に対応した語順が、いずれも70%を越えているが、この場合にも、時間表現「1955/70年に」を文頭に置いた和訳が、若干ではあるが現われている。

(1-4) Der erste Schritt zur Normalisierung war 1955 unter Bundeskanzler

Adenauer erfolgt.

「第一歩は、1955年に、アデナオアーの下で」
60名 (70.6%, 85名中)

「第一歩は、アデナオアーの下で、1955年に」
18名 (21.2%)

「1955年に、アデナオアーの下で、第一歩が」
3名 (3.5%)

(1-6) Bundeskanzler Willy Brandt traf
1970 mit dem sowjetischen Partei- und
Staatschef Leonid Breschnew zusammen.

「ブランドは、1970年に、ブレジネフと」
61名 (71.8%, 85名中)

「ブランドは、ブレジネフと、1970年に」
9名 (10.6%)

「1970年に、ブランドは、ブレジネフと」
11名 (12.9%)

このような時間表現を文頭に置く語順を、逐語訳に反するものとして、直ちに間違いとすることには、問題があるであろう。なぜなら、この語順は、日本語の自然さから、学生が、無意識に取っているものと考えられるからである。このことは、前域（文頭）に時間表現が置かれた（1-3）、（1-9）の場合、和訳でもドイツ語に対応した語順の守られている割合が高い（96.5%と95.3%）ことから、窺うことができる。

(1-3) Seit Jahrzehnten bemüht sich der
Westen um Ausgleich mit der Sowjetunion.

「何十年も前から、西側は」
82名 (96.5%, 85名中)

「西側は、何十年も前から」
3名 (3.5%)

(1-9) 1973 kam das deutsch-sowjetische
Erdgasgeschäfte zustande.

「1973年に、商談が」
81名 (95.3%, 85名中)

「商談が、1973年に」
4名 (4.7%)

結局、文成分がすべて理解されていれば、和訳での語順は問題としないか、語順も逐語的に一致させるように求めるかは、授業の目的によって異なるだろう。しかし、特に注意を促さなければ、上記のような語順が高い割合で生じること、つまり日本語の干渉がこのような形で現われることを、学生に気付かせることは、いずれの場合も必要なことであると思われる。

8. まとめ

本稿では、「読み」の授業の中で目に止まった問題点のうち、比較的単純な誤り、英語の干渉、前置詞 bei, 付加語的な zu 不定詞句 / daß 文, 受動文, 語順を取り上げ、さまざまな考察を試みた。いずれの問題も多面的、複雑であり、十分な考察とは言い難いが、これまで意識していなかったいくつかの事実気付くことができた点で、有意義であった。学生をできるだけ早く自立させることのできる「読み」の授業を実現するために、今後も問題点の把握と理解を深めたいと考えている。

注

- 1) 授業方法については、恒川 (1994) 参照。
- 2) 授業で取り上げたのは、以下の8テキストである。
 1. Kohl in Moskau (1) ("Deutschlandspiegel", 1989年2月, 和訳レポートの総数85名/課題文の総数10/受動文の数2)

2. Kohl in Moskau (2) (同上, 1989年2月, 74名/14/6)
3. Kleiner Grenzverkehr (同上, 1989年7月, 93名/15/3)
4. Walter Kempowski (同上, 1989年9月, 94名/11/4)
5. Staatsbesuch Gorbatschows in der Bundesrepublik (同上, 1989年9月, 88名/15/6; 他に状態受動が1例)
6. DDR-Übersiedler (同上, 1989年11月, 87名/15/3)
7. Die Berliner Mauer fällt (同上, 1989年11月, 88名/15/6)
8. Sie sagen immer noch "Drüben" ("Ihre Welle - Deutsche Welle Radio" 1993年7月, 95名/11/0, 他に状態受動が2例)

さらに, Ursulla Wölfel: "In einem solchen Land" (白水社) を夏期休暇中の課題として扱ったが, 本稿では, 考察の対象とはしていない。

- 3) たとえば, 昨年度は授業時間内に完成, 提出させた和訳レポートを, 今回は, 時間的余裕を十分に与えるため, 翌週提出とした。
- 4) ヴァレンツ, 文脈, アスペクトなどは, 別稿で扱う予定。人名, 地名などのカタカナ表記も重要な問題であるが, データが十分でないため, 本稿では扱わない。
- 5) 以下, 例文の番号を (テキストの番号 - 課題文の番号) のように表示する。なお, 集計で「その他」に分類されたものは, スペースの都合上, すべて省略する。
- 6) またこの例では, コロンの意味も, 十分に理解されていない。「(グラスノスチ) で/によると/において」のように, 言葉で言い換えた例が, 16.5%ある。
- 7) 注2) に挙げた受動文の数を参照。
- 8) したがって, 受動の大部分には, 何らかの形で受動文であることを明示した。
- 9) 時間表現が含まれない場合には, ドイツ語の語順が, 比較的よく反映されているように思われる。

(5-3) Darüber waren sich beide Staatsmänner einig.
 「そのことについて, 2人の政治家は」など 73名 (83.0%, 88名中)
 「2人の政治家は, そのことについて」など 13名 (14.8%)
- 10) 村木 (1991; 191), 森田 (1989; 217ff.) 参照。
- 11) 南 (1993; 48ff.) 参照。

参考文献

- 恒川元行：初級ドイツ語の「読み」の指導について、『言語文化論究』第5号，1994年。
 南不二男：現代日本語文法の輪郭，大修館，1993年。
 村木新次郎：ヴォイス。「講座日本語と日本語教育」第4巻，明治書院，1991年，所収。
 森田良行：誤用文の分析と研究，明治書院，1989年。

Sprachliche Probleme beim Leseverständnis deutscher Texte

Motoyuki TSUNEKAWA

In den Sommersemestern 1993 und 1994 behandelte ich in meinem Deutschunterricht für die Studenten des 3. Semesters das Thema "Die Wiedervereinigung Deutschlands, davor und danach". Der Schwerpunkt meines Unterrichts lag darin, die Lesefertigkeit der Studenten durch Viel-Lesen zu verbessern und gleichzeitig ihre Deutschlandkenntnisse zu vermehren. Zu diesem Zweck wurden 7 Videofilme aus der Serie "Deutschlandspiegel", die dazugehörigen Texte und ein Text aus dem Prospekt "Ihre Welle - Deutsche Welle Radio" benutzt.

Die vorliegende Arbeit untersucht, mit welchen sprachlichen Problemen die Studenten im Rahmen dieses Unterrichts beim Verstehen und Übersetzen der Texte ins Japanische konfrontiert waren.

In dieser Arbeit werden die folgenden Probleme behandelt:

1. Einfachere Probleme wie Wortverwechslungen aus Formähnlichkeit.
2. Ernstere Probleme wie
 - a) Interferenzen aus dem Englischen und dem Japanischen,
 - b) die Präposition "bei",
 - c) der attributive Infinitiv mit zu und der attributive daß-Satz,
 - d) das Passiv,
 - e) die Satzgliedfolge in der Übersetzung im Vergleich mit der im Originaltext.

Andere Probleme wie Valenz, Kontext oder Aspekt möchte ich in einer späteren Arbeit behandeln.